

解答と配点

$\widehat{100} \widehat{1}$									問題番号 (配点)
8	7	6	5	4	3		2	1	
					$\widehat{\text{II}}$	$\widehat{\text{I}}$			
(b)	(a)	(c)	(b)	(a)	(e)	(a)	(d)	(b)	正答
12	14	14	14	14	12	12	4	4	配点

1 解説

1 傍線部 a「間欠的」は、一定の時間を置いて起こったりやんだりするさまを指す。対義語は「連続的」。正答は (b)。各選択肢のカタカナ部分を漢字に直したものは、次のとおり。

- (a) 達観 (b) 民間 (c) 感(慣)性 (d) 看(甲)板 (e) 看破

2 傍線部 b「代謝」は、生体内で、物質が次々と化学的に変化して入れ替わること、また、それに伴ってエネルギーが出入りすることを指す。正答は (d)。各選択肢のカタカナ部分を漢字に直したものは、次のとおり。

- (a) 容体(態) (b) 体感 (c) 大破 (d) 世代 (e) 応対

3 「身体論」と呼ばれる分野の文章で、私たちの身体とはどのようなもので、どのような価値を持つかということが論じられる。「あなたの身体の範囲はどこまでか？」という問いかけに対しては、「自分の神経感覚が及ぶ範囲」という答え方がまず考えられそうである。しかし筆者は、自分(＝私)自身の感覚が及ぶ範囲と、他者が私を見て、私の身体だと認識している範囲という二つの表象の重なり合う部分こそが身体だという。この問題意識が示されているのが、文章冒頭に引かれた傍線部 1 と、その次の一文である。

(Ⅰ) 傍線部内の「収まりが悪い」とは、「当てはめて考えようとすると、うまくいかない」という意味。「主観的に経験される世界を神経表象に還元しようとする見方」と、「身体」とは相容れない概念だといえる。傍線部に続く文では「身体」について、「主観的に経験される私の現象空間と、他者が経験している現象空間とが一致する場所に現れる」とも説明されている。この対立構造は、次の段落で「神経構成主義の前提を拡大し」て説明したのち、その次の段落で「ところが、私の身体は、…」としているところからも読み取れる。

正答は (a)。傍線部の次の段落で「神経構成主義の前提を拡大し」て説明される「世界の表象」のあり方をみると、「自己の脳と他者の脳」は、「それぞれの世界をそれぞれのしかたで構築して」おり、「別々の世界に閉ざされたしかたで存在する」と述べられている。

(b)・(c)・(e) は、自己と他者との「一致」を説明しており、誤り。(d) は「自己も他者もイメージにすぎない」が誤り。

(Ⅱ) 傍線部の理由については、傍線部に続く文で「自己の身体は、主観的に経験される私の現象空間と、他者が経験している現象空間とが一致する場所に現れるからである」と説明されている。よって正答は、この一文と同じ内容を述べている(e)。

(b)は傍線部の理由を説明するためにとりあげられている具体例。より一般化して述べられている(e)のほうが適切。

(a)は「他者の主観的に取り込まれてしまう」、(c)は「身体だけは表象にならない」、(d)は「他者の脳内に生み出された身体表象と同じ」の部分が本文になく誤り。

※このあと、現象学の「ライブ」「ケルパー」という概念の紹介、「幻肢」や「新生児模倣」に対する考察、哲学者メルロ・ポンティの「間身体性」の説明を経て、身体は自己の主観的な領域に閉じているわけではなく、社会的なものであるということ、そして、個人の意識は身体を介して世界と接続するという主張へ繋がっていく。後の設問でも見るように、何と何を対比しているかを常に意識して読み進めたい。

4 3で解説した「神経構成主義」と「身体」の対立構造について、正しく説明されている選択肢を選ばよ。正答は(a)。

(b)は、前半も後半も「かゆい場所」を他者が示す場合の説明になっており、誤り。

(c)は、前半と後半の内容が対比された説明になっておらず、誤り。

(d)は、前半が誤り。本文には、「神経構成主義の前提を拡大」した場合でも、「私の世界に現れる他者の表象」には出会うことができると述べられており、「自己完結した形でイメージ化」とまでは書かれていない。

(e)は、神経構成主義の説明内容と、(現実の)身体の説明内容が逆。

5 傍線部3の直後に、幻肢が認識可能な理由を「脳内の表象に還元されない、四肢の主観的な空間的広がり(＝ケルパー)」を、私たちがもともと知っているから」としている。傍線部と併せてみるとつまり、「ライブとケルパーの不一致」が認識されるからこそ「幻肢」という状態が生まれるのである。逆に、傍線部の前段落のように「ケルパーが存在しない」「身体は全て脳の表象であり、実体がない」のであれば、「ライブとケルパーの不一致」という問題は起こりえず、「幻肢」という状態も生まれない、というのが筆者の考えである。このロジックを説明できている選択肢を選ばよ。正答は(b)。

6 傍線部4「しかし」の前後に注目。「たんに…しているだけである。しかし、そうであるからこそ、…絡まり合って経験されているとも言える」とある。前半では「単純なもの」としつつ、後半では、だからこそ「絡まり合っているもの(＝複雑なもの)」として、対比している。これが表れている選択肢は(c)と(d)。(d)の前半「他人を認識すること」だけでは、新生児模倣の説明として不十分。よって、正答は(c)。

7 「新生児模倣」の話以降では、以下の二点が説明されており、傍線部5もその一部なので、以下の二点を説明している選択肢を選ばよ。

・私たちは①「ケルパー」として現れる他者の顔」↓②「ライブとしての自己の身体」

↓③「ケルパーとしての自己の身体」の順に経験する。

・これらは相互的に絡まり合って経験されている。

正答は(a)。

(b)は、「人は生物学的・生理学的に閉じられた系」・「他者との相互的な応答関係を経て、安定した物体のような存在となる」が誤り。

(c)は、「根底的な相互関係を支えていたライブを特別な物体として把握している」が誤り。本文には「他者の顔を：特別な物体として知覚している」とある。

(d)は、「ライブより先にケルパーを自己として把握」が誤り。

(e)は、「ケルパーとしての自己を通して他者を模倣するが、その体験が世界におけるライブとしての自己を形成する」が誤り。

8

本文全体を振り返ると、まず「神経構成主義」の考えでは、実際の「身体」について説明がつかないという主張がなされたうえで、自己の身体と他者の身体は、相互的に関わり合い、他者と共有される世界で構成されている、と説明されている。そして最後の段落では、「これはたんに身体の問題ではない」「意識は身体を介して、他者と共有される世界へ接続している」という主張につながっている。正答は(b)。

(a)は、「人の身体は、…」とあるが、筆者は最後の主張で「これはたんに身体の問題ではない」としているのが、本文の趣旨としては不適切。

(c)は、「神経構成主義は、…まちがっている」とあるが、筆者は自身の主張を説明するためにあえて対立する「神経構成主義」を引き合いに出しているのがあり、本文の趣旨ではない。

(d)は、「相互的な関係によって安定する」が誤り。

(e)は、本文にない内容。